

人沢康夫 詩的関係についての覚え書

詩的關係についての覚え書

著者・・入沢康夫

発行者・小田久郎

発行所・株式会社思潮社

東京都新宿区市谷砂土原町三―十五

電話二六七―八一四―振替東京八―八二二―

印刷所・凸版印刷

製本所・凸版印刷

発行日・一九七九年十二月十五日

定価・・一八〇〇円 1092-200031-3016

©1979, Yasuo Iwasawa

装画・・レオナルド・ダ・ヴィンチ



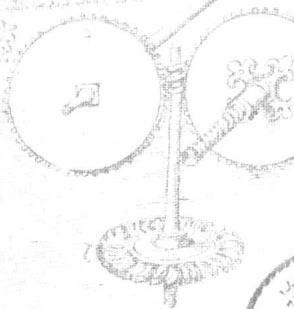
日文 701720064

114154

入沢康夫 詩的関係についての覚え書 思潮社

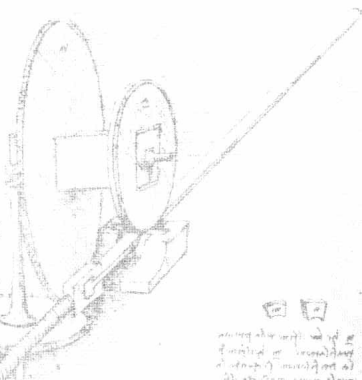


Technical drawing of a circular mechanical component with a central square hole and concentric circles.



Technical drawing of a mechanical assembly featuring two large gears connected by a horizontal shaft, with a vertical support structure.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring two large gears connected by a horizontal shaft, with a vertical support structure.



Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

Technical drawing of a mechanical assembly featuring a large circular component, a smaller circular component, and a long horizontal shaft.

目次

詩的關係についての覚え書 一九七七

- | | |
|------------------|-----|
| 1 迂路と直路と | 10 |
| 2 迂路から迂路へ | 19 |
| 3 騙る主体(その一) | 30 |
| 4 騙る主体(その二) | 43 |
| 5 騙る主体(その三) | 53 |
| 5 bis 化鳥の変貌 | 63 |
| 6 騙る主体(その四) | 77 |
| 7 「作者」と「読者」 | 84 |
| 8 「詩人とは誰か」をめぐる断章 | 94 |
| 9 異化道断・言語同断 | 104 |

詩の在り処 一九七七

- | | |
|-----------------|-----|
| 『いいだ・もも詩集』と詩的青春 | 114 |
|-----------------|-----|

散文詩は何処へ

「文学研究」の「方法」

六〇年代後半の詩の問題

あるモダニズム詩人の変貌

「蛇足の面白さ」について

詩歌作品の「読み解き」

選詩集の愉しみ

吉増剛造の詩の新展開

大自然のポエジー

唄と語りと

一人の「著者」の死

*

幻の「フローズン・ツリー
凍れる木」

ブリュッセルの劇場火災

詩の発見 一九六

散文詩の種々相

最新の詩集から

ある死にかかはる詩

聴く詩・観る詩

夢の記録

詩の「自在さ」

新しい詩人たち

『ギリシア詞華集』の楽しさ

詩の本文のことなど

詩の擁護

215 210 204 197 189 184 178 172 165 160

詩的關係についての覚え書

詩的關係についての覚え書

一九七七

1 迂路と直路と

私が、「現代詩手帖」に「詩の構造についての覚え書」の連載をしたのは、昭和四十一年から四十二年にかけてのことだった。それから丁度十年が経った今、この同じ雑誌に、新しい「覚え書」を書き綴らうとするに当って、ささやかな感想をまづ書き付けることをお許しいただきたい。この十年間に、私には、以前見えなかったいくつかの点が今でははっきり見えるやうになった一方で、当時は見えてゐるつもりだったいくつかの点が今では見えなくなつてゐるといふ面も、たしかにあると感じられるからだ。そして、そのために、これから書いて行かうとしてゐるものは、前回の「覚え書」の延長線上にあるものとは、必ずしも言へないと思はれるのである。「と思はれる」などといふ、何やら無責任に聞こえかねない物言ひをしたが、これは全く正直な言ひ方なのであつて、私には、前の「覚え書」が「何であつたか」がはっきりと判つてゐるわけではなく、ましていはんや、これから書かうとしてゐるものが「何であるのか」も、はなはだ心もとない状態なのだ。（今、私がミスティブィカションなどとは全く縁のない

ところで語ってゐることは、判る方には判っていただけらう。）

今度、久しぶりに、前の「覚え書」をざっと読み返してみ、確認できたのは、自分が決して理論向きな人間——論理的な人間ではない、といふ一事だった。もともと、この自己判断は、今にはじまったことではなく、前回の連載当時、そしてそれがとりあへず一冊の単行本になった当時から重々氣付いてゐたことで、自分が詩論家でないことは以来折りに触れて言明して來たし、また、同じ年に本になった『わが出雲・わが鎮魂』と對比して、「自分のつもりでは、むしろ『出雲』が詩論であり、『覚え書』は詩なのだ」といった見解を述べたこともあったと記憶してゐる。強引に主張したいある想ひが胸からあふれて來るままに、いはばなりふり構はず、ろくろく問題点の整理もつけずに、投げだしたといふ感じのものを、よく『詩的』といふ風に表現するが、それに従へば、まさしく、あの『覚え書』の方が、『詩的』であり、『私的』でもあった。

いま、十年が経って、あのときあんなに性急なまでに私を衝き動かしてゐたものが何だったかと振返って見ると、それは結局、当時においてはまだほぼ一般的に信じられてゐた「作者→作品→読者」の天下りの一方交通の考へ方に対して、何としても疑問符を貼り付けたいといふ欲求に他ならなかった。作者が作り、読者が受け取るといふ安直な図式が、その時までの體驗によつて、しだいに信じられなくなつてゐたのである。あの図式は何だか變だぞ、

「詩」を書き、「詩」を読むとは、そんなことではないはずだぞ、と声を挙げ、その声が他人の耳にとどきさへすれば、その余のことは、じつはどうでもよかったし、また、その余のことを論ずる余裕もじつは無かったのだ。

いったい、あの「詩の構造についての」といふ言葉からして問題であった。《構造》といふ語を用ひて、本当に掘り起したかったのは「読み・書く者」と「世界」との関係であったのに、自分で選んだ《構造》といふ語にふり廻され、とかく「作品」の構造、そして作品の構成法の問題の方へ足をすくはれては、またあわてて立ち直るといったことを繰返し、無駄な脱線と適切でない引例とで、自分も読者もとまどってしまふことも再三あったやうに思ふ。

そのやうな事態が生じたのも、今にして思へば、あの「覚え書」を私をして書かした内的衝迫と、当時私が意識的にはかなり強固に信じてゐた一種の「作品絶対主義」との間に、大きなギャップがあったせゐである。強い予感として内心から湧き上つて来てゐながら、十分に意識化されてゐなかったものと、すでに意識面に根を下して安住してゐたものが、共存し、混淆したのであった。《構造》といふ用語の外延と内包が、とかく揺れ動いたのも、ここから来たのだと思ふ。

また、そこには、次のことがらも作用してゐた。「覚え書」を書く以前の私は、《日本においては、作品絶対視の考へ方そのものが、きはめて少数派であり、ほとんどの詩論は、作者の生

き方（伝記）や、作中に陳述されてゐる思念によつて作品を云々してゐるにすぎぬ」といふ認識を持つてゐた。そして、何よりも、作品を中心に据ゑた文学論が確立することが、急務であると考えてゐたのである。そして、この認識、この考へ方の正当性は、現在でも、一面において維持されてゐると思ふのだが（そのことは、現在でも多くの低劣な詩観・文学観がそここに横行してゐることによつて裏付けられる）、当時の状況では、なほのこと二正面作戦を強ひられる形になり、自己分裂に身をゆだねずには済まなかつたやうである。作品絶対主義に疑問符を付けるために、まづ作品絶対主義を標榜しなければならぬといふ、春秋の筆法に似たやり口が要請されてゐたのだつた。（さうした事態について、当時の私が十分に自覚的だつたわけではないが、ある程度感じてゐたのは、連載の第一回目に、「自分自身を今度こそ徹底して、架空のオペラと化すること」などと書きしるしてゐることからも判る。）

だが、Aを倒すために、まづAを擁立しなければならぬといふ種類の考え方自体、政治の次元のものではあつても、文学の次元のものではない。私は、詩におけるその種の政治家になる必要は毛頭ないのであつた。私があの時、ぜひ言はねばならなかつたのは、詮じつめれば、「詩の作品中で一人称で語つてゐる人物（作者によつて仮構された人物）と作者とを混同してはならない」という一点に尽きてゐたのであり、その他はすべてなくもがなだつたとさへ思ふ。右の一点が十分に主張されてゐれば、やがては作者と作品と読者に関はる諸問題は、おの

づとそこからたぐり出されて来るからである。

さて、新たな「覚え書」を書き綴ってみようといふ今、「環境」は、前回よりも、ある程度変って来てゐるやうにも見え、また少しも変ってゐないとも、いっさう悪化してゐるとも言へさうな氣もする。しかし、たとへば、次のやうな文章を含む書物も、当時はまだ日本語では読めなかったのである。

“近代運動”の大きな影響の一つは、“意図”と“内容”という考えを信じないことであつた。(……) 芸術家は“近代運動”によって初めて自分自身の作品に問を發し、それを知りたいものとみなして、作品の物質的特徴を前面に押し出すことができるようになった。また、これは知らぬ間に一種の神秘的自然主義に陥ってしまうだろう。神秘的自然主義は、工芸品を木のごとき自然物と等しくあつかひ、そのため、その記号としての身分を完全に消し去ろうとしていた。あるいは逆に、これは技術者へと向かうことになってしまふだろう。そのときかれは、道具としての作品をただ完璧にするため、芸術の物質的諸相にもつぱら注意を集中するのである。ある意味で、近代芸術はルネサンスの伝統と縁を切ることができるやうな記号学を探し求めていたのだつた。(……) 必要とされたもの(そしていまだに必要とされているもの)は、疑わしい通常のことはづかひをくつがえし、

変形する記号学であった。これによって、信号やテキストは人間と真理、ないし意味——ロマン主義思想が持つ観念的・超越的真理であれ、古典主義美学が持つ内在的・意図の意味であれ——とのあいだに存在する手段・媒介物であるとはみなされなくなった。

(……) 芸術の記号学的土台をこのようにつくりなおすことのイデオロギー的効果は、最も重要なものであるだろう。それは読者や観客の意識を、もはや受信人・消費者・鑑定人として作品の外側に位置づけるのではなく、かれの意識をテキストそのもののなかで賭けるようにしむけ、そこで、かれは読みながら自分自身のコード、自分自身の解釈法に問を発せざるを得なくなり、こうしてかれ自身の意識のスペースのなかで亀裂と間隙を生みだせるのである(亀裂と間隙は現実に存在するが、ブルジョワ社会に特徴的なイデオロギーによって抑圧されてある。そのブルジョワ社会は、それぞれ個人の意識の「全体」と統合を強調する)。(……) テキストはもう透明な媒体ではない。それはそれがみずからに課す拘束内部で、意味生産のための諸条件を提供する物質的対象である。それは閉ざされたものでなく開かれたものであり、単一のものでなく複合的なものであり、消耗的なものではなく生産的なものである。それは個人、作家によって生みだされはするが、単に作家の考えを表示したり表現したりするのではなく、自己生得の権利で存在する。それはコミュニケーションの手段でなく、コミュニケーションが存在し得るという神秘化への挑戦であ